



## ○4度目

春季写真コンクール分校生徒出品写真「木次町桜土手」⇒

1学期期末試験が終わりました。昨年度は臨時休校や総体中止など艱難辛苦とも言うべき日々でした。今年度は延期等が若干あったものの教育活動がほぼ実施できたこと、そのために感染症対策等に取り組んだ生徒、保護者、教職員、地域のみなさまに感謝するばかりです。本当にありがとうございました。



さて、マラソンに50歳になって挑戦しはじめたことは前にもお話ししました。そのきっかけは隠岐養護学校の生徒たちのがんばりでした。自分がなにかに挑戦することで、なにかのメッセージになれば…そんな思いからでした。

実は、それまでに長距離を3度失敗というか、断念したことがあります。最初は大学4回生の時。大学から室戸岬まで夜通し約90キロを歩き通すイベント「室戸貫歩」でした。挑戦したい気持ちはあったものの、卒業論文の締め切りが近いことを自分自身への言い訳に参加申し込みをしませんでした。同じアパートの友人が参加したので、深夜差入れをもって約40キロ地点の(阪神タイガースのキャンプ地で有名だった)安芸市まで行きました。がんばっている友人や他の学生の姿を目の当たりにして、逃げた自分が恥ずかしくなり、衝動的にそこから歩きました。深夜0時過ぎのことだったと思います。ゴールの室戸岬の中岡慎太郎像付近に着いたのがお昼前。その時の光景は今でも思い出すことがあります。なぜか道中水戸黄門を口ずさんでいました。しかし、思い出すたびにこみ上げてくるのは、なぜスタート地点に立たなかったのかという、逃げた自分への後悔の念です。

その後教員になり母校の女子ソフトテニス部顧問となったある年、地元で鳥取県の大山寺から一夜にして平田の鰐淵寺まで弁慶が釣鐘を運んだという伝説をもとにした弁慶ウォークというイベントが開催されました。夜出発して寝ずに歩き通し、翌日夕方頃までかかる100キロの道程です。今度は逃げずにスタートラインに立とうと、女子部員も誘って申し込みをしました。日本海テレビが日テレ24時間テレビとタイアップして、女子ソフトテニス部を24時間追い続けることになり、途中途中でインタビューをされることになりました。ある意味背水の陣です。しかし…約90キロ地点の自宅付近で足が動かなくなりリタイヤしました。途中途中でインタビューは24時間テレビの番組中に生放送されたものの、翌日ニュースで放映された総集編では、顧問は最初からいなかった設定で編集されていました。ちなみに、女子部員は全員完歩。あと2時間ほどががんばれませんでした…。

翌年再挑戦しましたが、テレビ中継もなく部員も誘わず張りがなかったからか、平田どころか東出雲でリタイヤ。これで3回連続自分に負けたことになりました。このイベントはその後大人や学生がサポートして体育館等に泊まりながら歩く小学生向けのイベントになりました。それに長女が参加し、見事完歩しました。完歩したものだけが見せる表情に、自分の弱さを重ね合わせ、いつか克服したいと思いつけ50歳を迎えた時に転機がありました。

隠岐養護学校では、隠岐の島ウルトラマラソンの壮行式をします。学校には大きな隠岐の島の地図が掲示され、スタート地点に出場する教職員の顔写真が貼られます。さらにボランティアとして参加する生徒たちや教職員の顔写真も担当する給水地点に貼られます。隠岐の島ウルトラマラソンでは、小中学生や隠岐養護学校の生徒たちが割り当てられたランナーに激励の手紙を書き、それが参加証と一緒に送られます。お礼の手紙を送ってきたり、学校にお礼に言いに来たりするランナーもいます。そんな手紙や光景が地図に花を添えます。

私は、その地図の縮小版をつくり、ポケットに忍ばせて50キロ走りました。「あの給水所にはあの生徒がいる。そこまでは走らないと…」そんな連続で気づいたらゴールしていました。その時から走る時はいつも「克己」と大きく文字の入ったTシャツを着て走っています。ゴールした瞬間、それはやっと己に克てた瞬間でした。ウルトラマラソン完走者に贈られるメダルは毎回色が違い、7回完走すると虹色レインボーとなります。50キロをあと3回、通算7回完走してレインボーメダルになったら、次は未知の100キロの道程に挑戦したいと思っています。